
魔法先生ネギま! ~FT厨二病降臨~

S P E C 100%

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま～～FT厨～病降臨～

【NZコード】

N8625Y

【作者名】

SPEC100%

【あらすじ】

「魔法先生ネギま！」の一次小説です。短い生涯を終えた主人公が神様からのご恩を受け「ネギま」の世界に転生する。そこでフェアリーテイルの魔法を使って原作ブレイクしていきます。魔法世界編から原作介入します。始めからではないのでご了承下さい。

オリキヤラ出でてきます。主人公もオリキヤラです。

「FAIRY TAIL」のセルフパロディやネタ、魔法（さらに自分で強化した魔法）が出てきます。またキャラも出でてきます。オリジナルの魔法が出てきます。中傷や批判は控えて下さい。キャラ崩壊して

いると思います。自己満足で書いています。更新は不定期。それでも、よろしい方は読んでみて下さい。初めての小説なので、未熟で駄文ですがよろしくお願いします。

最強の厨一病爆誕（前書き）

駄文ですがよろしくお願ひします。まずは主人公と神様の出会いです。

最強の厨一病爆誕

俺はいつのまにか真っ白な空間にいた。
なぜここにいるのか…

俺は確か病院で死んで…ってことはここは天国か。

「ということは、あれができるじゃねえか…」

俺は立ち上がり構えた。

「我が前にて歴史が終わり、無の創世記が幕を開ける…ジエネシス・ゼロ…!!」

俺は叫んだが、何も起きない…

「ハハハハ！！！やっぱ人がいないとやりやすくていいわ！」

そり…この通り俺は変な奴である。属性は厨一病。ちなみにさつきのせりふは、連載中の漫画フェアリー テイルに出てくる敵が切り札出す時に言つたせりふ。

「天国だか地獄だか知らねえが、これでやりたい放題だぜ…！」

俺は生前にはないほどのハイテンションで喜ぶ。

「ゴホンッ…！」

いきなり大きな咳が後ろから聞こえた。恐る恐る振り向くと…

「まったく…さすがにうるさいぞ！静かにせんか…」

そこには推定年齢10歳の女の子が立っていた。

「すみません。ついつい一人だけだと思い込んでしまって…えっと、どうひらひらさま?」

そう言つと女の子はため息をついて言つた。

「…………おぬし、ここが天国とわかっているのなら、なぜ我が神だとわからぬのだ?」

……はい?

「えつ、神様つて仙人みたいなおじいちゃんが天使の輪ついているのじゃないの?」

「さつき変なポーズとつて変なことを口走つていたおぬしに言われたくない!!!」

神様が顔を真っ赤にして言つ。
ありやりや、神様!立腹だわ…

「すまん、すまん。とりあえず、神様はなんで俺に用があるんだ?」

俺が謝るとすぐに神様は機嫌を直し、落ち着いた声で言つた。

「ふむ。おぬしは短い人生で終わったからな。今から好きな世界に転生させようと思う。感謝するが良い」

「マ…マジか!…ありがてえ…好きな世界つてことは漫画やアニメ

の一次元世界でもここのか?」

「 もちろんじや。おぬしが望む世界ならどんな所でも転生してやる
う」

「 じゃ……じゃあ、ネギまの世界でいいか?」

「 せつ……なぜその世界に?」

「 あの漫画って前半はほのぼのしていのけど、後半になると話しが重くなつて主人公10歳なのためちやくちや苦労するだらう? だから少しでも助けてやりたいんだ」

「 ふむ。おぬし、厨一病で馬鹿なのこい奴じやな

「 わつかくここと」と言つたのをなんと言わぬいでくれ……正直傷ついた

俺は床に倒れる。

「 すまぬーまさかここまで落ち込むとは……おー、しつかりせい
ー!」

俺は神様の手を借りて立ち上がった。

「厨一病は打たれ弱いんだ.....」

「そ.....そつなのか.....」

「」

「……そ、それよりーー。」

重い空氣に耐えかねた神様が元気良く振る舞つ。

「そのネギまの世界に行くからには何かしらの能力が必要じやろつ
……そこでじゅーおぬしにそれを含めた願い事を二つ叶えてやるわ」

「今宵…冥王が降臨する…」

俺、即復活。

神様はそんな俺に完全に呆れていった。

「さっきまで立ち上がる事さえできなかつた者が、途端に復活し
おつて…まあ、よい。それで願い事はどうするのじゅ？」

「まずは…」れだ！…

つと俺はポケットから携帯を取り出し操作した後、神様に画面を見
せた。

すると神様は困惑した顔で叫ぶ。

「何じゅ、これは？」

「それは俺がフェアリー テイルで好きな魔法をまとめたメモさ。や
れるの魔法を使わせて欲しい」

「…………やはり痛いことをじてこむの」

神様は直球で言つてきた。

「『めんね、『めんね…痛く『めんね…』」

つと言つて俺はまた倒れる。

「すまぬ、すまぬ…！我が悪かつた…！」

神様はこれ以上面倒なことにならぬよつて俺をなだめる。

「…これで願い事は一つじや。よく考えるんじやな。」

「じゃあ、不老不死で」

俺は何事でもなかつたよつて起き上がつた。

「……即答じやな…」

神様は呆れて言つ。

「わかつた。では最後の願い事じや。これはよく考えるんじやぞ」

「決まつたぜ」

俺は即効答えた。

神様はそんな俺に呆れてため息をついた。

「……おぬし、ちやんと考えたのじやうつかへこくらなんでも早過
ぎるわ～。」

「ちやんと考えたぞ」

俺は少し間をおいて言った。

「俺を原作が始まる600年前に転生させて欲しい」

「なつー?」

神様は目を見開いて驚いた。

「ちよつと、ある吸血鬼少女がどんな過去を歩んだのか…知りたくてな。それに俺、人生短かつたからもつといろんなことを経験したい」

「……なるほど。おぬしが望むのならよからう。ではおぬしの願い事は

- 1、自分の好きなフュアリー・テイルの魔法を使用可能にすること。
- 2、不老不死にすること。
- 3、転生は原作が始まる600年前にすること。
これで良いか?」

「ああ、頼む」

俺は挙ぎようにして言つた。

すると神様が突然

「ちよつと、おぬしに聞きたいことがある」

「と聞つてきた。

「ん?なんだい?」

俺が答えると神様は怪訝な顔して

「転生するから今までの記憶がなくなつてしまつたが良いのか？」

「しまつたアアアアーー願い事に入れるの忘れてたアアアアーー！」

俺は頭を抱えて叫ぶと神様は

「安心せい。特別に記憶はそのままにしてやる！」

俺はその言葉を聞いて叫ぶのをやめた。

「えっ、いいのか？」

「ふむ。なんだかおぬしと話していくて楽しかったからな。そのお礼
じゃ〜〜」

神様は満面の笑みで言った。そんな神様を見て俺は可愛いと思つてしまつた。

「や、そんなに楽しかったのか？」

「ふむ／＼我は一人じゃ。たとえ話したいと思つても話せぬのじゃ
…じゃからこんなに誰かと話したのは久しぶりじゃ／＼」

「でも、ここには天国なんだろ？だつたら死んだ奴と話す」とぐらり
できないのか？」

「厳密に言つとこには我が造りし異空間…天国は別の場所じゃ。我

は神じゃ……迷う魂を天国へと案内しなければならん……

そんなことを言つた神様はどうか寂しそうだった。

「それに神は人間などの他の生物とは接触してはならん。たとえ魂でも……」

神様の顔は今にも泣きそうただの女の子に見えた。
俺は神様の所まで歩み寄り、優しく彼女の頭を撫でた。

「はづき！？／＼」

神様は驚いたのか声をあげた。そんな神様に俺は言つ。

「…………神様はこんな俺にいろんなものをくれた……この恩は一生忘れない……だから約束する……俺がまた死んでここに来たら、こんな俺でもいいなら、いつでも話し相手になつてやる……その時、もし強制的に天国行きになつても、ここへばかりついて神様の話しを聞いてやる……」

俺は彼女の頭から手を離した。

「受けた恩は必ず返す……それが俺の厨一道だ」

彼女は涙目の目を擦つた後

「厨」病で馬鹿であるおぬしなんかに、神である我の話し相手などを勤まるものか

そんなことを言つた彼女だが、その顔は嬉しさに満ち溢れた笑顔だ

つ
た。

「それでは行くがよい！人間よ！！」

神様が叫ぶと床から巨大な扉が現れた。

「でつけH H H H H H H H ! ! ! ! !

俺はあまりにも大きな扉に絶叫する。
扉は「ゴゴゴゴ」と開いた。

「わあ、行くのじやーー！」

つと語りて神様は俺の背中を押す。

一待て待て！！肝心の魔法や不老不死の能力もらってねえぞ！？」

大丈夫じゃ
もう二回とした

「…試験に合格したり合格しなかったり…それと並んで、じつはもう一つの問題があります。それは、この問題を解くためには、何よりもまず、問題文を理解する必要があります。つまり、問題文を理解するためには、何よりもまず、問題文を理解する必要があります。」

今度は俺の服を引っ張つて歩みを止める。

「どう、どうしたんだ？」

そう答えると神様は少し頬を赤く染めて

「…………おぬしの名が何じゃ？」

「俺か？俺は富堂国介フドウコウサケだ」

「富堂……国介……覚えておへのじや／＼」

そして、俺は扉の前まで着いた。

「約束は……必ず守る……それまで元気でな！神様！－！」

俺が手を振った後

「おぬしも元気でな！－！国介！－！／＼

神様も手を振ってくれた。俺は笑顔で手を振る神様に照れながら、扉をくぐった。

最強の厨一病爆誕（後書き）

主人公、いきなりフラグ立てたような…しかも相手は幼女神様：いきなり暴走していますがよろしくお願いします。次回は主人公の魔法などの紹介の話しになります。

ネギモーの世界に到着。だなび、リラクゼー? (前編)

一話です。かなり短いですが、読んでみて下さい。

ネギまーの世界に到着。だけど、何が何だ?

「さてと、ついに来たか。ネギまの世界……」

俺はそう言つた後、大声で叫んだ。

「ククク……俺はこの時を待つていたんだ!……ずっと待つてたんだ!……！」

厨一病モード発動。

「！」の富堂匡介……いや、「！」のハーテスが……この世界を冥界へと落としてやる……手始めにまず魔法の確認をつと……」

俺は全身に魔力を込めた。

「闇刹那!!」

俺は魔法名を唱えると、自分の周りが瞬時に闇に覆われた。

「おおー！スゲーー！」

さらに魔力を込める。

「幽兵ーーー！」

また魔法名を唱えると今度は大量の骸骨が現れた。

「ヤベホーー！マジで魔法使えてるんじゃん！……んじゃ、あの壊して

みるか…「テッドウェイブ…！」

俺は地面に両手を突き、怨靈を飛ばして岩を粉砕した。

「ホントやべえな…この破壊力は…あれもやってみるか！」

俺は魔力を込めた右手を突き上げた。

「常闇回旋曲…！…！」

右手から十以上の怨靈を飛ばして近くにあつた木々を薙ぎ倒す。

「ハハハハ…おもしれえ…！…！」ダークカブリチオ常闇奇想曲…！…！」

今度は左手から螺旋巻く光線を発射して、近くにござるある岩を次々と破壊する。

「シメだア…！…ダークグラビティ…！…！」

俺は両手を地面の方に向けると、ズゴン……と大きな音がして地面に巨大なクレーターができた。

「…………少しやり過ぎたか」

辺りを見渡すと俺の攻撃魔法でほとんど荒れ地と化していた。

「ん？ そういえば人、いなくね？」

もう一度よく見渡すが人影もない。

「ああ、そつか。ここは森か……だから誰もいない……ってだからここどこー？」

ネギまの世界に降り立つたのはいいが、肝心の自分の居場所がわからなかつた。

「クソオ……つてことは現実世界なのか魔法世界なのかもわからないのか……神様に場所を指定すればよかつた……神様アアアアー！！ヘルプ！ヘルプミィイイイイー！！！」

俺は絶叫したが、何も起こらなかつた。

「……………とりあえず、ぶらりぶらり行くか…………」

俺はあてもなく、トボトボと歩いて行つた。

ネギモーの世界に到着。だたぶ、リラクゼー? (後編)

今日はいい日です。次回から超展開します。

「完全なる世界」所属魔導士、冥王（ハーツ）（前編）

更新遅れてしましました。申し訳ありません。

こんな感じでやつてこなすので、温かく見守って頂けると嬉しいです。

では、本編をどうぞ。

「完全なる世界」所属魔導士、魔王（ハテス）

ある青年が異界に降り立つてから600年の時が流れた。

ここは廃都オステイアにある墓守りの宮殿。かつて黄昏の姫御子がいた聖地。そこに宮殿から外を眺める一人の男がいた。男は赤いタートルネックに黒いハッピを着て、下にはジーパンを履いている地味な男だった。特徴といえば右耳を包帯で覆っているところだけだ。そんな男のところに一人の少年が現れた。白髪の少年は不思議そうに男に尋ねる。

「こんな所で何をしているんだい？」

男はゆづくりと答えた。

「いや、たいしたことじやねえけど、世界が生まれ変わる前に今の世界を目に焼き付けようと思つてな」

「こんな世界に何か未練でも？」

男は苦笑いで言った。

「こんな世界でもいろいろと世話をしたからな。忘れねえよついと思つて」

少年は男の答えに鼻で笑つ。

「フ…あなたらしいね」

少年が言つた後、遠くから声が聞こえてきた。

「フェイト様ア－、匡介様ア－、夕食ができましたよ～」

声の主は猫耳の少女だった。白髪の少年、フェイトは少女の言葉に答える。

「うん。今行くよ、暦さん」

猫耳少女の名は暦^{ハタケ}。黄、フェイトに助けられた少女の一人である。フェイトに命を救われた恩^{コスモ}に報^{エンテレ}いのため、自分とは違う救われない人達のため、完全なる世界^{コスモ・エントレ}の完成を目指している。

「了解、暦。あと俺は匡介じゃない、世界を混沌の闇へと突き落とす者、ハデスだ」

フェイトと話していた男もとい匡介（ハデス？）は暦に敬礼するよう手を動かして言った。

そんな匡介に暦は苦笑いで

「おかしなことを言つてないで早く行きますよ、匡介様！せつかくの（ご）飯が冷めてします」

そつ言つた暦はフェイトともつ歩いていた。

「悪リイ、悪リイ。お前らが作ったご飯おいしいからな。冷めちまつたらもつたいねえもんな。それと俺は匡介じゃない、ハデスだ」

匡介はフェイト達に追いついた後、そつ言つて暦の髪を撫でた。

「こやこやー？／＼そ、そんな褒めなくとも…／＼」

「いや、そんなことないよ、暦さん。君達の料理はいつもおいしいよ。感謝してる」

フェイトも暦の髪を撫でる。

幸せ廻れて死んでしまひだらやへ
せむへへへへへへへへへへ

幸せそうに悶える暦を見て匡介はハハハと、フェイトはフツと笑つた。

と、四人のメイド服を着た少女達が待っていた。

眼を閉じてゐる（見えているのか？）少女、ウェーブ髪でエルフ耳の亞人の少女、色黒で、額にハートマークのような紋章を持つ少女と一人一人特徴が異なるが、共通点としてみんな美少女だった。その美少女達のそばの長テーブルに美味しいそうな料理が一人分ずつ並べてある。

「ご苦労様。それじゃあ、早速食べようか」

フェイトがそう言つて椅子に座ると、それに合わせて匡介達も席に着いた。

「ハテスさん」

美味しそうに料理を食べる匡介にフェイトは言った。

「ん？ どうした？」

「次のゲートポート破壊にあなたも参加して欲しいんだ。ちょっとあちら側に厄介な人がいてね…」

フェイトの言葉に匡介は眼を細める。ちなみにフェイトが言った「あちら側」とは摩帆良学園の3年A組の生徒達と魔法先生ネギ・スプリンングフィールドによる一派のことである。

「ほつ… フェイトが他人に興味を持つとは珍しいね…」

匡介の言葉に眼を閉じている少女、調シラカベが反応した。

「フェイト様、何か問題でも？」

「いや、たいした問題ではないと思つけどね。
ちょっとしたイレギュラーが存在しただけだよ」

そう言ったフェイトにウエーブ髪の少女、栞シオリは尋ねた。

「黄昏の姫御子の完全魔法無効化能力ですか？」

「確かにお姫様の能力も脅威だけど、まだ完全に力を引き出してないからそんなたいしたモノじゃない」
「では、一体誰なのでしょうか？」

フェイントの次の言葉を促すようにツインテールの少女、焰は言った。ホタル

フェイントはコップに入った珈琲を一口飲んだ後言った。

「この前、リョウメンスクナノカミを復活の時に、あの英雄の息子に邪魔されて失敗したのはもう話したよね？その時、英雄の息子の仲間に『サトナカコイ』という女の子がいたんだ。その人にはこうびどく邪魔されてね。僕でさえも歯が立たなかつたよ」

「ええー！？ フェイント様がつーーー？」

暦は驚いて椅子から立ち上がった。他のメンバーも信じられないという顔をしている。ただし、匡介は片眉を上げただけだった。

フェイントはそんな彼らに構わず話しを続ける。

「彼女は『魔法を粉々にした』から、なんらかの能力を持っていることは確かなんだけど、正体が分からない。そこで、転生者として600年の時を生きたハーティスさんにその相手をして欲しいんだ。」

フェイントは真剣に匡介の眼を見つめた。

フェイントがなぜ匡介が転生者ということを知っているのかは、フェイント達に初めて会った時に匡介自身が自分のことを全て話したからだ。

「……了解。協力するぜーーー！ ただし、条件がある

「条件？」

フェイントは匡介の言葉を聞いて片眉を上げた。

「月詠を雇つのはやめてほし……やつあれば、協力する」

「月詠さんを？なぜ？」

「アイツの戦闘狂はヤバイ……俺達は血を流さずに目的を達成する方針のはずだ。ヤツがいると計画に支障が出る……そう思わないか？」

国介に尋ねられたフェイトは考え込む。国介はさうて念押しが言った。

「それに、月詠の空いた穴は俺で埋められる。どうだ？」

フェイトは珈琲を一口飲むと言った。

「いいよ。そのかわり、ちゃんと働いて貰つかうな」

「了解……」

国介はフェイトに敬礼した。

「フェ、フェイト様……」

暦がフェイトに近づいて言った。

「私も行きます……さつきの話しひ通りなら、フェイト様が危険です。私もゲートポートに行かせて下さこ……！」

「そうです。一人でもいた方に越したことはないです。私達も連れていくて下さい」

焰もフェイトにお願いし、フェイトガールズ全員がひざまづく。

「……気持ちは嬉しいけど…君達はここにいて欲しい。肝心のアジドががら空きじや、元も子もないからね」

彼女達は少し残念な顔した。

「さあ、食事を続けよう」

フェイトがそう言って彼女達を促し席に座らせた後、匡介はまた料理にかぶりつくのだった。

夕食後、匡介は焰達の皿洗いの手伝いをしていた。

食事の用意もしてくれた彼女達を後片付けも任せるのは匡介の性分上、申し訳ないと思うので皿洗いは手伝っている。なぜ手伝いなんかというと、前に皿洗いは全部自分一人でやると言つたら、それはダメですとフェイトガールズに猛反対されたので現在はみんなでやる形になっている。

ちなみにフェイトはいない。

匡介はいつも通り皿を洗つていると突然、隣で皿を洗つていた焰に声をかけられた。

「匡介様。フェイト様は私達のことが邪魔なのでしょうか…」

「は、はい！？」

匡介はあまりにも衝撃的なことを聞かされたので、洗つていた皿を落としそうになった。

「な、なんでそう思うんだ？」

「フュイト様はあまり私達に頼つてくれないです」

同じく皿を洗つていた暦が言った。

「なのにフュイト様は匡介様みたいに他の人ばかり頼る…私達じゃなくて…」

栄が悲しそうに言つた。

「……なるほど。だいたい分かった。つまり、焰達はやきもちまたは嫉妬してゐるわけだ」

匡介はサラつと言つた。

対して焰達は微かに頬が赤くなつてゐた。

「俺が思うにたぶん、フュイトは焰達を危険な目に遭わせたくないんじゃないの？」

「えつ？」

調が不思議そう匡介の顔を見た。

「それにフュイトがそんなふうに思うヤツじゃないぜ？俺なんかより焰達の方がアソツと付き合いが長いんだから、一番分かっているとはずだけどな」

「……」

「俺が思うのもあれだけど、フュイトはお前達を邪魔なんて思つて

いねえよ。フュイトにとつてお前達かけがえのない仲間だよ

「……私達は命を救つてくれたフュイト様を疑つてしましました」

焰が悲しそうに言つ。

「まあ、お前達の大将は無愛想だからな。俺からも言つとへよ。あと、今度の作戦は俺に任せろ。焰達の大将は必ず護る

匡介は焰の髪に手に置いて撫でた。焰の顔が赤くなる。

「約束だ。必ず護る」

匡介はそう言つて焰の頭から手を離すと、

「わあ、皿洗いちやちやつと終わらせつけ」

「「「「「はい！」」」」

匡介とフュイトガールズは再び皿洗いを開始した。

しばらくして、皿洗いが終わつた匡介は部屋に戻ろうとした時、声をかけられた。声の正体は今まであまりしゃべらなかつた額にハートマークのような紋章を持つ少女、環タマキだった。

「環イ……もう少ししゃべらないと、小説的にダメだぞ」

何の話をしているだらうといつ感じで首をかしげる環。匡介は不覚にも可愛いて思つてしまつた。

「今日はあつがとうございました。相談に乗ってくれて」

「ああ、俺は話し聞いて勝手に意見を言つただけだぜ？」

「これからもよろしくお願ひします……おやすみなさい——」

「ああ、おやすみ」

匡介は環と別れて部屋に戻つていった。

「完全なる世界」所属魔導士、冥王（ハーデス）（後書き）

ついに次話、匡介が原作ブレイク開始。
そして、新たな転生者が！！次話は必見です。

次話、「正義の転生者」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8625y/>

魔法先生ネギま!～FT厨二病降臨～

2011年12月21日21時50分発行